

「東山魁夷～その作品」

突然ですが、世界で熱い注目を集める現代アートの村上隆作品、そしてチームラボのデジタル作品と東山魁夷の作品に共通するキーワードはなんでしょう。

それは日本画です。

表現方法も題材も三者三様ですが、彼らの作品の多くが中国水墨画などのような東洋の遠近法で表現されていて、平面的な感じがします。

日本画の反対語である西洋画は画面正面に立った鑑賞者一人の視線で作られているのですが、東洋の絵画は右から見ても左から見ても何人もが同じように鑑賞でき、まるでその作品の中に自分が入り込んでいるかのような感覚を与えます。

明治時代、日本美術を評価し紹介に務めた東洋美術史家フェノロサは日本画の特徴を次のように言い表しました。

「写真のように写実を追わない、陰影がない、輪郭線がある、色調が濃厚でない、表現が簡潔である」

このうち東山魁夷作品にはいくつあてはまるとおもいますか？

このような日本画で表現されるのは、対象物の外観ではなくその本質やそのアーティストの心象です。

現代アートでは様々な表現手段で制作されますが、伝統的な手法では日本画は墨、岩絵具、胡粉、染料などの天然素材を使い、膠を接着剤として和紙や絹、木、漆喰などに描かれます。

このような伝統的画材は扱いにくく習得にも根気がいるので、現在学校教育としては大学の専門課程でしか学べませんが、今でもこの様式がすたれず、見直されて現代アートに取り入れられているのは、日本画が日本の風土、美意識、精神性に合っているからだといえます。

春夏秋冬で表情を変える日本の自然。

そんな風景を捉えるべく風景画家を目指した東山魁夷に生涯の師となった結城素明は「心を鏡のようにして自然を見ておいで」と言葉をかけました。

魁夷の自然をモチーフにした作品の前に立つと木のさざめきやの空気の揺れ、動物の鳴き声といった自然の持つ「動」の部分より、ただただ自然の静けさを感じます。

作品のモチーフの場所に行ったことがなくてもどこか見たことがあるような、触れたことがあるような気になるのは、魁夷の作品が私たちの心の中にある自然を求める気持ちを呼び起こしてくれるからなのでしょう。

横浜生まれ神戸育ちの東山魁夷は、東京美術学校時代から通い「私の作品を育ててくれた故郷」と言い表した長野県の山々で日本の自然観を深く学びました。

感受性が強く、神経質であった若き東山魁夷は人よりも自然に深い慰めを感じたのです。

それも太陽が燦爛と注ぐ、生命力を誇るようなキラキラした自然ではなく、重々しく厳粛で静かな自然に惹かれました。

ヨーロッパへの留学で、当時多くの芸術家があこがれたパリを選ばず北のベルリンを選んだのもそんな彼の志向からだったといわれています。

その後もヨーロッパへの旅や滞在で西洋美術の影響を受け、風景からインスピレーションを得ました。

特に1962年54才の時の北欧旅行では、デンマーク・ユトランド地方にある小さな町リーベで「自己の根源に響きあうものを見出した」と言うほど、彼が探し求めていた風景のアイデアが形となって目の前に現れたと感じたそうです。

常に旅をして制作するタイプの彼は「故郷にいても心の中では異邦人である場合があるが私はこの北欧の森に来て、安らぎと落ち着きを見出したのである」と言っています。

みなさんの安らぎと落ち着きを得られる故郷はどこですか？

明治から平成にかけて自然を見つめてきた魁夷は現代文明に対する悲しい憤りをしばしば口にしています。

50代後半、東山魁夷は京都に取材した連作を描いていますが、それは今のうちに描いておかないと安っぽいビルが立ち並び、山が見えなくなり京都がなくなってしまうという焦りの気持ちからでした。

彼が亡くなった1999年以降も世界中で自然破壊、地球温暖化がすすみ、街の景観もどんどん変わっていますが、もし魁夷がまだ存命であったらどう思ったのでしょうかね。

東山魁夷は文学作品や音楽にも造詣が深く、執筆の際は特にゲーテの次の言葉をたびたび引用しています。

「涙ながらにパンを食べたことのない者、苦難に満ちた幾夜をベッドの上で泣き明かした事のない者、おまえは天上の力をしらない」

青春期には肉親の死や戦争を体験し、また繊細な神経からの人間関係の葛藤もあったことでしょう。

そんな苦難を乗り越えた魁夷の作品だからこそ、私たちは深く大きい何かに包まれるような安らぎを見出せるのかもしれませんが。

青春時代にベートーヴェンやシューベルトに惹かれた魁夷は晩年モーツァルトを良く聞いていたそうです。

みなさんも東山魁夷作品を鑑賞する際、お好きなクラシック音楽を頭の中で奏でながら、安らぎと落ち着きを感じられる故郷に思いを馳せてみてはいかがでしょうか？

原稿執筆と音声 : FOM日本語ガイドグループ リム美智代